

## 北欧へのいざない—北欧の子どもの本と展示会の見どころ

平成 18 年 7 月 15 日

講師：福井信子

福井信子です。どうぞよろしくお願ひいたします。

第 2 部では、今日から始まる「北欧からのおくりもの—子どもの本のあゆみ」というこの展示会の見どころをお話したいと思います。

今、ここに地図を映します。これは、スウェーデンの画家、アンナ・ヘグルンドが描いた北欧の地図です。一番小さなデンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、でも北欧はこれだけではありません。ちょっとずらしていただくと、アイスランドがあります。そして、デンマークの自治領のフェロー諸島があります。

今回の展示会では、この五つの国とフェロー諸島と合わせて本を紹介します。言語については、デンマーク語、スウェーデン語、ノルウェー語、フィンランド語、アイスランド語、フェロー語という六つの言葉を使用しています。今日は最初にこの六つの言葉を音声で聞いていただきたいと思います。

### I 北欧とフェロー諸島——北欧の 6 つの言語の紹介

まず最初に『彗星がやってきた』というタイトルの本をお見せします。ノルウェーの、現代の画家が描いた絵が表紙です。これは、北欧の、今使われている六つの言語での詩のアンソロジーです。現代を代表する作家たちが詩を書いて、現代を代表する画家たちが絵を描いています。目次をご覧ください。これは、色が違うだけの国旗ですけれども、国旗を並べて、どの国の作家か分かるようになっていています。例えば、スウェーデンのところの、上から三つ目ですけれども、詩はバルブロ・リンドグレン、絵はエヴァ・エリクソンとあります。児童文学の世界で活躍している人たちで、スウェーデンで今年のアンドルセン賞候補になったのがこの二人です。そして、フィンランドでは、その下に名前が見えますけれども、ヴィルピ・タルヴィティエ、そして、こちらの方の上から四つ目のハンネレ・フオヴィです。右側にはクリスティーナ・ロウヒという画家の名前が見えますが、やはりいろいろな絵本で日本にも知られています。こういう人たちの絵本などに至る、それまでの北欧の子どもの本のあゆみを今日は紹介したいと思います。

最初にデンマークを紹介します。キアステン・ハママンが書いた詩にドーテ・カーベクが絵を付けています。この本は、詩を書いた人自身が詩を朗読していて、キアステン・ハママン自身も詩を朗読しています。どんな内容の詩かといいますと、「こんにちは 私の名前はハーモニカ この本に住んでいます 私は紙の中 あなたが本を開いている間だけここに

います あなたにとっては本でも それが私にとっては現実 私の生涯は作家の書く言葉  
言葉しだいで人生は変わる 『月にいる』と書かれればその通りになり ピリオドが打た  
れると終わってしまう」。ちょっと斜に構えたような詩です。では、デンマーク語を聞いて  
ください。(原語省略)

次にスウェーデン語の詩を紹介します。スウェーデン語はバルブロ・リンドグレンが詩  
を書いて、エヴァ・エリクソンが絵を付けたものです。「嵐を待っている」という詩です。  
「私たちは嵐が近づくのを待っている だって嵐が好きだから 庭に出てこう叫ぶ 『お  
ーい嵐よこっちへ来い』 でも嵐はいつも向きを変える カルマル海峡辺りで だから叫  
んでも役に立たない 『嵐さんこっちへ来て 私と犬に風を吹き付けて』 と叫んでも役  
には立たない」。こういう詩です。先ほどのデンマーク語は、独特の喉の緊張があります。  
声門閉鎖と呼ばれるものです。スウェーデン語の方はメロディーがあります。では、スウ  
ェーデン語です。(原語省略)

次にノルウェー語を聞いてもらいます。「青」という詩です。詩を書いたのはエーヴァ・  
イェンセン、絵はグリユー・モウルスンです。先ほどの表紙と似ていて、何か子どもが描  
いたような感じの絵です。実は、これがノルウェーの今の特徴です。どんな詩かといいま  
すと、「青くて塩の味がするのが海 僕の周りにはみんな青 こうして波に浮かんだり潜っ  
たりしていると ここはグレートフィヨルド 大きな海が白い岸辺に入り込んでいる あ  
あ、なんて青い山と島 ああ、小さな山羊たちが山を登っている ああ、波が岸に砕ける  
音 海岸にはお弁当のかご」。ノルウェー語には2種類あるのですが、これは、ニュー  
ーノシュクという方です。では、ノルウェー語をお願いします。(原語省略)

次に全く系統の違うフィンランド語をご紹介します。ハンネレ・フオヴィの詩で、クリ  
スティーナ・ロウヒの絵です。「しずく」というタイトルです。「雲のお母さんがしずくを  
生み 子どものために歌った さあ、飛びなさい 恐がらずに 池に飛び込みなさい 暗  
く悲しげに雲が震え しずくは飛ぶ さざなみが池に浮かんだ」。では、フィンランド語を  
お願いします。(原語省略)

次にアイスランド語に行きます。「タンポポ」という詩です。ソウラリン・エルドヤルン  
の詩で、奥さんのシグルーン・エルドヤルンが絵を描いています。「タンポポさん あなた  
は本当に黄色いのね そう、太陽のようにと答える 遠慮なく タンポポさん あなたの  
ミルクは新鮮なの 少し茎を吸ったらまあ苦い タンポポさん 白くなったのね 綿毛の  
パラシュートはどこまでも飛んでいく タンポポさん もう私も帰るわ 来年の春にまた  
会いましょう」という詩です。右側の方がアイスランド語で、左側の方はデンマーク語訳  
です。デンマーク語ではタンポポのことをメルクベテといいます。「牛乳桶」という意味で  
す。茎の中の白い液をミルクに喩えています。タンポポに関して、ノルウェー語は、英語  
のダンデライオンのように「ライオンの歯」という意味のレーヴェタンという言い方をし  
て、スウェーデン語は、マスクロースというまた別の言い方があります。では、アイスラ  
ンド語をお願いします。(原語省略)

これがアイスランド語です。アイスランド語では、例えば、つづりの *ll* のところに *t* の音が入って聞こえます。タイトルもフィルヴィトリンと、*ll* なのですが、*t* の音が入って、現代のアイスランド語ではそのように発音されるようです。

最後に、フェロー諸島のフェロー語です。アレクサンドゥル・クリスチャンセンの詩に、エドヴァルド・フーレーが絵を描いています。また、エドヴァルド・フーレーは、展示の中では、フェロー語の ABC の絵本に、絵も描いています。この「天使」という詩は、「霧が窓辺にそっと押し寄せ 天使の羽のように枕元を包む 天使の息を肌感じると 夢が大きく広がる でも雨が激しく降ると あなたは目を覚まし 信じられずに目をこする窓辺に夢の天使が座って 目覚まし時計が鳴っている間 羽を乾かしている」。では、フェロー語をお聞きください。(原語省略) これがフェロー語です。フェロー語のこの正書法では、読み方にいろいろな規則があるようです。以上、六つの言語を紹介しました。

この本は、アイスランドとフェローからは詩を一つずつ、それ以外の国からは詩を二つずつ紹介しているという絵本でした。最初に見ていただいた北欧の地図は、アンナ・ヘグランドという画家が描いていましたけれども、この本自体のアイデア、インスピレーションは、スウェーデンの詩人のレンナート・ヘルシングからのものだと書いてありました。レンナート・ヘルシングについては、また後で紹介いたします。

北欧の五つの国について、北欧の景色を見たり、実際に北欧の国を訪れたり、料理をいただいたり、北欧の椅子に座ったり、いろいろ北欧に親しむことはできます。でも、私は、北欧のそれぞれの国の歴史の概略を知ること、北欧について、一番良い理解ができるのではないかと思います。今回の展示では、最初の方に北欧の地図と年表が掲示されています。私は、北欧の年表というと、それぞれの国の歴史が書いてあるもの、あるいは全部一緒にまとめて書いてあるもの 2 種類しか見たことがなかったのです。それぞれの国をこのように並べて、最後にはフェロー諸島まで独自の欄を設けて年表ができるとは考えてもいませんでした。これは、北欧展の準備に力を貸してくださった竹中玲磨さんが、年表の枠組みを作ってくださって可能になったものです。あの枠組みがあったからこそ、ここにもう一つこれを入れればはっきりする、とか、ここに入れた方が違いが際立つというふうに打合せができて、いろいろ良い方に展開していきました。ですから、竹中玲磨さんにはどんなに感謝しても感謝しきれない気持ちでいっぱいです。

## II 18世紀まで——歴史とお話のはじまり

では、子どもの本のあゆみということですから、古い方から始めていきたいと思います。展示では、北欧の子どもの本といったときに、どのようなものから展示したらいいのか、そこが一番問題でした。今回の展示では、「北欧神話」と「サクソ (*Saxo*)」をまず最初に挙げました。北欧神話は皆さんご存知のとおり、アイスランドで写本として残って、書き留められて現在に伝わっています。「サクソ」は、北欧神話よりも知名度が劣ると思います。デンマークのサクソ・グラマティクス (*Saxo Grammaticus*) という人がまとめたデンマー

クの歴史です。時代は、北欧神話がまとめられた時期と同じ 13 世紀の初めです。

サクソ・グラマティクスは、大司教アブサロンの書記として、アブサロンに命じられて、ヴァルデマー大王によるデンマークの統一までをまとめるように命じられました。サクソ自身については、それ以外のことはほとんど知られていません。

「サクソ」は、歴史とはいうものの、北欧神話など、それまでのいろいろなお話を集めたもので、一大お話の宝庫となっています。ですから、私たちの今回の展示では、まず最初の部分は、「歴史とお話のはじまり」と題して、「北欧神話」、それから「サクソ」を置きました。でも、展示した北欧神話の本は、決して貴重なものではなく、現代のアイスランド語でこのように書き直されているというだけの地味な本です。サクソの本も貴重な写本などではありません。そもそもサクソは『デンマーク人の事績』という本をラテン語で書きました。それが出版されるのは 16 世紀になってからです。その後にデンマーク語訳が出、またヨーロッパ各国にも広まっていくようになります。

デンマークは、北欧の国の中では一番歴史に富んでいて、だんだん小さな国になっていくのですが、その節目節目で、サクソの本が、新たにデンマーク語訳されて出てきています。今回展示されている本は、ルイ・モーという人の挿絵が入っている 19 世紀の終わりのものです。それから、2000 年になって出た、明るい挿絵がたくさん入っている女流作家ヘレ・スタンゲロブがまとめた再話の「サクソ」です。

ルイ・モーの挿絵の「サクソ」を、ちょっとお見せいたします。「サクソ」はお話の宝庫といいましたが、どんなお話があるかという、例えば、『ハムレット』のモデルになっている「アムレズ」というお話も、この「サクソ」に出てきます。アムレズは、父親を叔父に殺され、叔父はアムレズの母親と結婚します。アムレズは、叔父に復讐するために、ノルウェーの昔話の主人公のように、灰をかきまわしてばかりいて、わけの分からない言葉を言ったり、それから、この絵にあるように、馬に逆向きに乘ったりして、愚かなふりをします。これが、ルイ・モーの描いた「アムレズ」の絵です。

それから「ヴェアモンとウフェ」というお話があります。ウフェという、能無しとされていた王様の息子がいるのですが、父親の王様ヴェアモンが、だんだん歳を取ってきたために、息子の行く末を心配します。そのうち、ウフェは愚か者だという評判を聞いて、隣の国のドイツが攻めて来ます。そして、一騎打ちで戦うことになるのですが、年老いたヴェアモン王は、川のそばに陣取ります。王は目が見えなくなっているので、形勢を耳で判断します。ウフェは「スクレプ」という剣を使っているのですが、その剣の音が良く聞こえると、「ああ、これは形勢がいいのだ」と言って後ろに下がります。そして、「ああ、負けそうだ」と思うと、いつでも川に飛び込むことができるように、川の方に寄るとい、そういう場面も描かれています。

「北欧神話」と「サクソ」の後には、何が来るのかといいますと、あまりありません。それで、次に考えたのが、デンマーク文学の父と呼ばれている、ルズヴィ・ホルベアの作品です。ホルベアはノルウェーのベルゲン出身です。後で、年表を見ていただければ分かる

と思いますが、デンマークのコペンハーゲン大学と、スウェーデンのウップサーラ大学は、15世紀に創立されますけれども、ノルウェーのオスロ大学の創立は、ずっと後です。ですから、才能のあるノルウェー人は、ほとんどコペンハーゲンで教育を受けて、コペンハーゲンで活動します。ホルベアも、その良い例で、コペンハーゲン大学教授として、いろいろな著述活動を行っています。彼の著述には、歴史書をはじめとして、いろいろな分野があるのですが、特に、喜劇作家として知られています。その喜劇の中では、『丘の上のイエッペ』などは、現在も、日本でも上演されています。そのホルベアが書いた、『ニルス・クリムの地下旅行』という小説があります。もともとはラテン語で書かれたものです。それは、主人公が地下の様々な国を訪れて多様な考え方に会うという、当時のヨーロッパ社会を風刺するような旅行小説でした。これは、ずっと長い間、再話されて来ませんでした。最近になり、この『ニルス・クリムの地下旅行』を絵本で見ることができるようになりました。それを、先ほどのデンマーク語の詩に絵を描いた、ドーテ・カーベクの挿絵で紹介いたします。

全部で4冊からなっていて、これはそのうちの2冊目です。ページを開くと、このような国に行っています。そこは、「クヴァムソ」と呼ばれるブナの木の家です。訪ねた人は、ブナの木はみな長生きで、どんどん大きくなっていくので、これほど健全な国はないと思いました。でも、だんだん、その国が、何の喜びももたらしていないのだということに気づきます。つらい目にあったことがないので、長生きをして、そのままスクスク伸びることが、どれほど幸せかということは何も感じることもなく、喜びもなく暮らしている国だと分かった、という記述があります。

### III 19世紀——子どもの本のめばえ

では、『ニルス・クリムの地下旅行』の後ですけれども、この後は19世紀の方に入っていくと思います。19世紀こそ「子どもの本のめばえ」と題していいのではないのでしょうか。北欧に関して言えば、19世紀はデンマークのアンデルセン童話、ノルウェーの昔話—昔話は、北欧の中ではノルウェーのものが一番知られています—、そしてフィンランドの『カレワラ』、サカリアス・トペリウスの童話に代表されると思います。

北欧の歴史を考えたときに、19世紀になって、一番大きく状況が変わります。フィンランドは、1809年にロシアの大公国となります。それまで650年以上、スウェーデンの支配を受けていました。ノルウェーは、バイキング時代の最初の頃はとても勢いがあつた国でしたが、そのうち、デンマークに吸収されるようにカルマル連合の一員となります。そして、デンマークとの連合が、1814年まで続きます。1814年にデンマークの支配を離れて、今度は、スウェーデンの支配を受けます。一方、19世紀のデンマークは、1864年に、今度は、ドイツとの戦いで敗れて、国がどんどん小さくなっていきます。

そういうわけで、どの国でもロマン主義、民族主義が高まる時代が、19世紀です。今回の展示会では、流れの中では、アンデルセンの本は、ドイツで、挿絵入りで最初に出版さ

れたアンデルセン童話集1冊が置かれているだけです。でも、特別コーナーの最後の方に、アンデルセンが1ケースありますので、それを見ていただきたいと思います。

19世紀後半のデンマークでは、家族を中心とした、牧歌的なビーダーマイヤーの文化が発達します。その雰囲気象徴するものとして挙げられるのが、ヨハン・クローンの『ペーターのクリスマス』という本です。これは、いろいろな版が出ています。展示では、1870年にヨハン・クローンの詩に、兄のピエトロ・クローンが絵を描いた絵本を紹介しています。実は、1870年よりも前に、1866年に『ペーターのクリスマス』の初版が出ています。それは、随分変わった装丁の本でした。その出来ばえに満足しなかったヨハン・クローンが、1870年に作ったものが今回展示されています。それは、チラシの後ろにも載っています。後で、見てください。そして、新しい版になる時にいくつかお話が加わりました。例えば、この『ペーターのクリスマス』は、中産階級の家でのクリスマスの時期の過ごし方を書いたものなのですが、貧しいラスムスという少年を登場させて、ラスムス君にもおもちゃを貸してあげる、そして、もういらなくなった古い服もあげるという場面があります。この本はとても親しまれていたもので、いろいろな細かいところが話題になっています。ここの場面では、ラスムスという少年は、主人公のペーターよりも体が大きいので、古着をもらっても着られないというようなことが話題になりました。

それから、この『ペーターのクリスマス』は、詩の細かいところまで絵に描かれていたので、子どもたちにとっても喜ばれました。これが1870年のものですが、クリスマスツリーの上にコウノトリが立っています。詩では、そう書いてあるからそうなっているのです。また、お人形がどうこうというふうに書かれていると、お人形が、そのとおり絵になっています。現在の新しい絵本では、このクリスマスツリーには、コウノトリではなく、一際大きく輝く星が飾られています。

ノルウェーでは、ペーテル・クリステン・アスビョルンセンとヨルゲン・モーが昔話を出版しています。この昔話は、子どもを対象に考えて作ったわけではないのですが、その後、絵入りの昔話が出版されると、子どもたちに読まれるようになっていきます。ノルウェーは、デンマークの支配を離れたとはいえ、まだ独立できませんでした。そのため、ノルウェー語の書き言葉もまだできていませんでした。図録の年表を見ていただくと分かるように、スウェーデンやデンマークでは、宗教改革の後、すぐに聖書が翻訳されます。フィンランドでも言語が全く違うので、フィンランド語訳の聖書が出ます。アイスランドでもそうです。しかし、ノルウェーは、デンマーク語が書き言葉となっていたために、聖書はノルウェー語に訳されませんでした。ノルウェーでは、自分たちの書き言葉を持ちたいという強い願いを、誰もが持つようになります。それが原因で、現在の複雑な状況が生まれてきます。アスビョルンセンとモーが昔話で使ったノルウェー語というのは、デンマーク語をベースにして、ノルウェー語らしさを盛り込んだもので、これが、現在の「ブークモール」と呼ばれるものの基本になっています。でも、それではノルウェー語らしさが足りないという理由で、イーヴァル・オーセンがノルウェーの西海岸の方言を中心に、もっ

と純粋なノルウェー語を作ります。それが、「ニューノシュク」と現在呼ばれているものです。この先、ノルウェーの本の解説のところで、これはブークモールで書かれているとか、ニューノシュクで書かれている、という言い方が出てくるのは、この辺に関係があります。19世紀のノルウェーでは、ビョルンスチャーネ・ビョルンソンや、ヘンリック・イプセンなどの文豪と呼ばれる作家が出てきます。決して、子どもの本の作家ではありませんけれども、ビョルンソンの『日向丘の少女』や『アルネ』という本は、日本でも早くから紹介され、青春小説として親しまれています。接点を求めるとしたら、イプセンは、私たちはグリーグの音楽で、良く知っていますけれども、『ペール・ギュント』という戯曲の中で、「トロル」を登場させています。このようなところにも、この時代のノルウェーのいろいろな民間伝承を重視した動きなどがうかがえます。

ノルウェーの本では、エリング・ホルストが、それまでの伝承をまとめて絵本を作りました。この *Norsk billedbok for barn* (子どものためのノルウェー絵本) と書いてある本です。実際に今でも同じ体裁で出版されていて、これが、今回展示されていますので、ご覧になってください。表紙に描かれているのはトロルです。ちょっとはつきり見えませんが、向こうの山の方にも別のトロルがいて、「おーい、俺のかみさんを見なかったか」と呼びかけています。

ノルウェーの昔話が、絵が入ることで子どもたちに親しまれるようになったと言いました。では、トロルのいろいろな様子を紹介したいと思います。トロルについては、展示では特別コーナーで、取り上げています。これが Th.キッテルセンという、ノルウェーの画家の描いたトロルです。キッテルセンは世界中の人々から、トロルの画家としてよく知られています。

次に、スウェーデンのトロルの画家として有名なヨーン・バウエルを紹介します。こういうトロルを描いています。

これは、次の時代の説明で出てくるエルサ・ベスコフという絵本作家の描いたトロルです。この後、展示をもしご覧になれば、案内キャラクターがエルサ・ベスコフの描いたこの女の子だということが分かると思います。このトロルは、悪いことをしようとしているわけではないのですが、この森の小人たちを驚かせて、喜んで、死ぬほど笑い転げたようです。

では、19世紀の方の話に戻って、今度はフィンランドです。フィンランドでは、エリアス・レンルートが、フィンランドの東部やカレリア地方で採取した伝承をまとめて、1835年に『カレワラ』というフィンランドの民族叙事詩を出版します。その後、1849年には大幅に増補された版となります。フィンランドでは、フィンランド語を重視する運動が高まって、知識層が子どもの本に大きく関わるようになります。フィンランドのサカリアス・トペリウスは、スウェーデン語で書いた作家ですが、この時期とても重要な働きをします。フィンランドの森や、ラップランドを舞台にした話、祖国への愛や、いろいろな人々への愛などを強く子どもたちに訴えるような話を書いています。そして、トペリウス

の童話は、スウェーデン語で書かれていましたので、スウェーデンの子どもたちにも愛読されました。

展示では、『カレワラ』については、日本で早くから紹介された、子どものための「カレワラ」、それから『カレワラ』出版の150年を記念して出された豪華な絵の入った「カレワラ」がありますので、是非それをご覧になってください。特別コーナーの方では、「カレワラ」のパロディー版、犬を主人公にした「カレワラ」の絵本も展示されています。

#### IV 19世紀末から20世紀初頭——「児童の世紀」を迎えて

では、次の19世紀末から20世紀初頭、これは、スウェーデンのエレン・ケイが出版した『児童の世紀』という本にちなんで、展示会では「児童の世紀を迎えて」という小さなタイトルをつけて考えました。この頃になると今まで話題にならなかったスウェーデンで、いろいろな動きが出てきます。スウェーデンで最初の絵本が作られます。イェンニ・ニューストレムという作家の『子ども部屋の本』です。是非、注意して見てください。壁に大きなポスターが貼ってあります。それは、「スウェーデンの子どもの本400年」を取り上げた展示会のポスターなのですが、そのポスターと同じ絵の表紙が、ガラスケースの中にあります。それが、イェンニ・ニューストレムの『子ども部屋の本』です。それから、オットィリア・アーデルボリという作家の『王子たちの花アルファベット』、それから、地味な本ですけれども、とても貴重な『さっぱりペレとめちやめちや村の子どもたち』の原書が展示されていますので、それもお見逃しなく。

そして、この時期、興味深い本として、展示にもありますが、ここでも今ご紹介します。イーヴァル・アロセニウスという画家のもので、原題は『ねこの旅』とありますが、『リッランとねこ』と題されて翻訳、出版されています。これは、とても軽快な絵で、漫画のようなタッチと考えるといいかもしれません。リッランという女の子が、猫の背中に乗って、いろいろな動物と出会います。そして、動物と出会いながら、どんどんお話が進んでいくのですけれども、最後に王様のところに行って、大変ごちそうになります。そして、次のところですが、たくさん食べたために、猫のお腹がパチンと割れてしまいます。アロセニウスは、血友病のために若くして亡くなりましたが、ほんの短い幸せな時期に、自分の娘を膝に抱いて、こんなお話を語って聞かせたり、絵を描いたりしました。スウェーデンのイエーテボリの美術館には、このイーヴァル・アロセニウスの油絵などが展示されています。

では、次に、この時期のスウェーデンを語るときにはもっとも重要な作品、セルマ・ラーゲルレーヴの『ニルスの不思議な旅』をご紹介します。『ニルスの不思議な旅』は、1906年から1907年という時期に出ましたので、2006年の今年が、ちょうど記念の年にあたります。

## V 20世紀前半——新たな絵本作家の登場

では、時代を先に進めます。私たちは、北欧の子どもの本のあゆみのなかで、20世紀の前半は、「新たな絵本作家の登場」の時代と考えました。まず、まだ絵本ではないのですが、ノルウェーの興味深い本を紹介します。展示の中に、『アンネお嬢さん』という、一昔前の婦人雑誌のような表紙の本があります。それは、のびのびと育った娘が、都会で女性としての教養を身につけるというストーリーです。その展示の本の原書ですが、『アンネ・カリーネ・コルビン』と出ている（スライドの本の）真ん中の表紙、これが、作家バルブラ・リングの本の表紙です。ちょっと対照が面白いので、紹介しました。

フィンランドでは、この時期に、トペリウスに対して、もう一人の重要な作家、アンニ・スワンが出てきます。そして、ルドルフ・コイヴという、とても装飾的な絵を描く画家が出てきます。彼の名前にちなんで、「ルドルフ・コイヴ賞」という賞も設けられています。

そして、新たな絵本作家ということで、スウェーデンのエルサ・ベスコフをぜひ紹介したいと思います。先ほどの、トロールが隅に出てきた絵は、『もりのこびとたち』という絵本でしたが、それ以外に30冊以上もの絵本を出していて、多くが日本でも紹介されています。エルサ・ベスコフの展示コーナーは十分にとってありますので、ゆっくりご覧ください。

そして、もう一人、アリス・テグネールという、スウェーデンの子どもの歌の代表的な作者の名前をぜひ覚えていただきたいと思います。歌のことで、少し先走って説明いたしますと、デンマークの場合には、（スライドの歌の本を指して）この歌の本が、もう半世紀以上も親しまれています。デンマーク人なら、この金髪の男の子の絵の表紙を誰でも知っています。絵本の中の歌は、古めかしい感じの歌が多いのですけれども、こういうデンマークの歌の本があります。ノルウェーでは、これにあたるのが、マルグレーテ・ムンテという人です。特別コーナーには、「ABCの本」などいろいろありますけれども、歌の本のコーナーもありますので、各国の歌の本もぜひ見比べてください。

デンマークでは、エルサ・ベスコフの影響が長く続いたのですけれども、その影響を破るように、新しい風が吹き始めます。新しい絵本作家として、アーネ・オンガマンの名前を紹介いたします。アーネ・オンガマンは、ポスターなども手がける多彩な人でした。そして、イェンス・シグスゴーという作家の詩と、アーネ・オンガマンの絵で、いろいろな作品が生まれています。展示されているものは、『せかいにパーレただひとり』という絵本で、昔の絵と、1970年代になって描かれた絵と2冊の絵本の表紙が見ることができます。

（歌の絵本の紹介をして）この、「アーベル・スペンダーベル」は、昔から伝わっている歌です。そして、どういう歌かというと、「君のサーベルはいくらするの もし銅のサーベルが欲しかったら 義理の兄さんのところへ行きなさい もしガラスのサーベルが欲しかったら ピエロのところへ行きなさい」というような詩です。これに、今のような絵がついているのですが、昔はこの絵にどういう絵がついていたかということ、（画面を指して）こういう絵がついていました。この2冊の本を比べると、いろいろ面白いことがあります。

「ブロ・ブロ・ブリレ」という昔からの歌があります。これは、「11時だ 皇帝はお城に立

っている 兵隊さんみんな進め」と始まります。「さあ、急げ 兵隊さんは死ななければならない 最後の者は鍋に突っ込むぞ」というように、「進め、進め」と言っている絵です。これが、アーネ・オンガマンの絵では、こんなふうになっています。ところで、この詩の下から 3 行目と 4 行目の 2 行ですけれども、これはアンデルセンの童話の「しっかり者の錫の兵隊」の中で、錫の兵隊が、紙で作った船に乗せられて、ドブ川の中を進んでいって、水をかぶって、魚に飲み込まれるのですが、その時に聞こえてきた歌というのがこの 2 行の歌です。この歌は今でも歌われていて、歌が終わったときに腕を下ろして捕まえるという遊びの歌になっています。

アンデルセンの童話の中に出てくる歌ということで、これをもう一つ紹介したいと思います。「坊さんが野原に出ると」という題の歌で、お話の中には出てこないのですが、おやゆび姫が、もぐらのために歌うように言われて歌った歌が 2 曲あります。そのうちの 1 曲がこれです。「お坊さんが野原で、花やベリーを摘んで、恋人とこういうふうに踊っている」という歌です。

では、新たな絵本作家が登場したこの時期ですけれども、ノルウェーでは、ハルディス・モーレン・ヴェーソースという作家の『早春』という小説が発表されました。これは、こちらで日本語訳を展示しています。ノルウェーは、まじめな感じの本が多いと言えますが、シンケン・ホップのようなナンセンスなお話で注目される作家も出てきます。そして、韻を踏んだ面白い詩を作るアンドレ・ビエルケもいます。この詩の本は、表紙が「笑うセールスマン」に似ています。どうぞご覧ください。フィンランドからは、キルシ・クンナスの韻を踏んだ見事な詩集が横に並んでいます。

## VI 1960 年代——子どもの本の黄金期

次に、時代を進めます。第 2 次世界大戦では、スウェーデンは中立を保つことができましたけれども、それ以外の国は、それぞれ大変な時代を過ごします。デンマークは、あつという間にあっけなくドイツに占領されてしまいました。ですから、戦後は、戦争の被害が一番少なかったスウェーデンから、子どもの本は発展していきます。もちろん、アストリッド・リンドグレーンの名前が、それと深く関わっています。

まず、1961 年にスウェーデンで、ABC の本が出ます。レンナート・ヘルシング作、ポウル・ストロイエル絵の『ABC』です。ポウル・ストロイエルの絵では、右側の男の子を見れば分かるように、目はチョンチョンと、点二つで描かれています。ここでは、展示でもそのページを開いているのですが、「H」のところを紹介します。これはバイキングのハーラル青歯王です。歯が青くなっています。ハーラル青歯王とその友だちはつま先で立って、歯を磨いている。そして、ハーラル青歯王はこんなふうに考える。「歯が青くならなければ、ブルーベリーはもっといいのに」と。青歯王の青い歯というのは、ブルーベリーを食べ過ぎたからだという言われ方もするのですが、でも、虫歯だったのだろうという説が正しいように思います。それから、次は「O」のところです。オブシス・カロプシスが気球に乗っ

て、バーンと音を立てて飛んでいった。下の方から、お母さんが「降りてらっしゃい、おかゆがかたまって冷たくなっちゃうから」と呼んでいる。オブシス・カロプシスなど、いろいろなキャラクターの名前が、レンナート・ヘルシングや、デンマークではハルフダン・ラスムセンによって生み出され、どんどん広まっていて、多くの子どもたちに喜ばれています。この本は、特別コーナーに展示されています。

それから、60年代のデンマークの方を見ていきたいのですが、これは、『ハルフダンのABC』です。1967年に出版されました。これは、展示もされていて、壁には、ABCの全部が入ったポスターもありますので、印象深いと思います。ハルフダン・ラスムセンが詩を書いて、イプ・スパング・オルセンが絵を描いています。

これは、「E」のところです。エルセとは、女性の名前ですが、「エルセ エルスカ ペルセ」、ペルセ (pelse) は毛皮のことです。「エルセは毛皮が大好き」。「エルセ エルスカ ペルセ」。ペルセ (pølse) はソーセージのことです。「一日中エルセはペルセ (ソーセージ) を食べた そして、エルセのペルセ (毛皮) はきつくなった」。そして、あの『リッランとねこ』と同じように毛皮がはじけてしまいます。これは、ばかばかしい話です。

次に「N」のところを開きます。ノルウェーのニッセが出てきます。展示のところで、「トムテ」、「ニッセ」、「トントウ」という三つの言葉に出会うと思いますが、これは、同じものを指しています。スウェーデンでは「トムテ」、デンマークとノルウェーでは「ニッセ」、フィンランドでは「トントウ」という小人のことです。この「N」のところでは、「ノルウェーのニッセは鼻をぐずぐずしない 冷たい風が北から吹いてくると、ニッセは鼻の穴にニッセの鍵をかけるんだ」と、「N」を使って歌っています。このように、ハルフダン・ラスムセンとイプ・スパング・オルセンの組み合わせで、いろいろな本が生まれていきます。

次に、ハルフダン・ラスムセンの、縦長の絵本を紹介いたします。縦長の絵本では、展示会のチラシやポスターにもなっている、イプ・スパング・オルセンの『つきのぼうや』がよく知られていますが、『背高のつぼのマセン』という絵本が、ハルフダン・ラスムセンの詩、別の画家の絵で作られています。これは、いつもチビだったペーター・マセンは、大きくなりたいと思い、洗濯機のローラーに巻き込まれてしまって、背が4メートルにも伸びてしまった、という話です。最後のところでは、小麦粉の袋が落ちてきて、また、もとの大きさに戻ってしまいます。(絵を見せて) この絵が、ローラーに巻き込まれて、絞られて伸びているところです。

では、レンナート・ヘルシングのもう一つの絵本を紹介します。「グルカ」というのは「きゅうり」のことです。「グルカさんが踊っている ワルツとマズルカ」。グルカとマズルカのところで韻を踏んでいます。そして、グルカさんは緑、兄弟も緑、そして、二人とも靴下を履いているけれども、靴を履いていないというページです。そして、右側の方ですが、今度も野菜が出てきます。真ん中のところに「セルマ セロリ」。セロリのセルマとあります。「セルマ」は普通の名前ですから、何も取り立てて言うことはないのですが、子どもの本の展示では、「セルマ」と言うと、絶対にセルマ・ラーゲルレーヴを思い

出すので、あのラーゲルレーヴの名前が、「セロリのセルマ」と言われているというのは何かとてもおかしいように思いました。

このような本は、流れの中でも出てきていますけれども、特別コーナーの韻を踏んだ詩や歌のところにもあります。この時代では、次に、アストリッド・リンドグレーンをたくさん紹介しています。日本語の翻訳、それから原書、そしてリンドグレーンの小品に新しいいろいろな画家たちが絵をつけた絵本も並んでいます。例えば、ラーシュ・クリンティングや、ピーア・リンデンバウムの絵本もありますので、どうぞお楽しみください。

そして、ノルウェーにもインゲル・ハーゲルuppという作家の、子ども向けの楽しい詩の本があります。ノルウェーでは、この時期に、ラジオの子ども番組から三人の重要な作家が出てきます。トルビョルン・エグネルと、アルフ・プリョイセン、アンネ＝カット・ヴェストリです。この三人はとても多才で、自分で歌を作ったり、演じたり、子どもたちも大喜びしました。

トルビョルン・エグネル作の『カリウスとバクトゥス』は、イエンスという男の子の口の中のカリウスとバクトゥスという虫歯菌が、イエンスの歯をどんどん壊して行って、最後は、歯が痛くなったイエンスが歯医者さんに行って、歯医者さんが流す水に流されてしまうというお話です。この小さな絵本も面白いものです。

それから、「スプーンおばさん」シリーズ。これは、アルフ・プリョイセンの作品です。ノルウェーでは、ボルグヒル・ルーという画家の絵で親しまれています。スウェーデンでは、ビョーン・ベルイの絵です。日本に来たときは、スウェーデンを経由して入ってきたので、日本ではビョーン・ベルイの絵で親しまれています。そのような絵の違いも見てください。ビョーン・ベルイの絵は、チラシやポスターなどでも使われたものです。そして、展示ではその後に、たつぷりとトーヴェ・ヤンソンのコーナーが続きます。

展示では、本の下に簡単なあらすじも書いてありますので、気に入った本などがありましたら、ご覧になってください。私が最近一番気に入ったのは、『ペリカンの冒険』（レーナ・クルーン著）という本のあらすじです。それは、1羽のペリカンが人間になることを決意し、仕事や家を見つけて生きていくというふうに始まるのですが、ぜひ読みたいという気持ちになりました。

## **VII 1970年代——社会リアリズムと子どもの本**

次に1970年代に来ます。この時代は、社会のいろいろな問題が、暗い方面から描かれているようなリアリズムの時代です。代表的な作家として、例えばノルウェーでは、トールモー・ハウゲンというアンデルセン賞を受賞した作家がいます。デンマークでは、セシル・ボトカーという「シーラス」という少年を主人公にしたシリーズで知られている作家もいます。現在まで14巻出ています。そして、そんなに目立たないのですが、フレミング・クヴィスト・メラーという作家の『自転車に乗る蚊のエーゴン』という絵本もあります。何か、好き勝手に描いているような絵本ですが、デンマークの文化の中では、「文化急進主義」

の流れを着実に継承しているというような言い方をされて、とても評価されています。

そして、オーレ・ロン・キアケゴーという作家の一連の作品もあります。40歳になる前に亡くなったのですが、作品数が少なかつただけに、まだ生きている間にそのほとんどが早くに日本で紹介されたという、とても興味深い作家です。

スウェーデンでは、マリア・グリーペというアンデルセン賞作家が出ます。いろいろな作品を書いていますけれども、『忘れ川をこえた子どもたち』は、ファンタジーとして、とても面白かったという声を聞きますし、子どもたちが自分のアイデンティティーを求めて、いろいろ模索するような作品もあります。

スウェーデンでは、もっとシンプルに日常生活を描いた絵本もたくさん出ていて、(絵本の絵を見せて)これがお父さんで、男の子はアルフォンスといい、これがその男の子の顔です。『おやすみアルフォンス!』は、グニツラ=ベリィストロムの作品です。なにか、とても楽しいスウェーデンの良さが現れている作品です。『おばけのラーバン』や、『アンナちゃん、ボールで遊ぶ』というような絵本は、インゲル&ラッセ・サンドベルイ夫妻の作品です。

この時期には、北欧では、障害を持った、耳が聞こえない子ども、目が見えない子どもと一緒に楽しめる本も出てきます。その中の一つとして、今回の展示でも、いろいろデンマークから助けてくださった、バージニア=A=イェンセンさんの『これ、なあに?』という絵本をご紹介します。これは、ざらざらとしていて、手触りで目の見えない子どもも、一緒に楽しめるようになっています。

フィンランドでは、この70年代からは、マルヤッタ・クレンニエミとカーリナ・ヘラキサという名前を挙げたいと思います。

### **VIII 1980年代——発展する絵本とファンタジー**

次に、80年代に進みます。80年代は、70年代の反動として、もっと日常生活を描き、明るい方向で、絵本が豊かに発展していった時代です。そして、ファンタジーも盛んになります。富原眞弓先生も、クリスティーナ・ビョルクの本を紹介されましたが、レーナ・アンデションという作家も、この時期から現在にかけて重要な働きをします。

そして、最初のノルウェー語の詩のところで紹介した、エーヴァ・イェンセンなどの名前も挙げられます。今まで、ノルウェーの絵本というのがなかなかなかったのですが、この時期になって、ノルウェーが絵本に力を入れ始めたということで、ヴェンケ・オイエンのような画家が出てきます。スウェーデンでは、過去を振り返った本や、質の高い青少年向けの本が出てくるようになります。代表的な作家としては、ペーテル・ポールの名前が挙げられます。フィンランドでは、『サンタクロースと小人たち』のマウリ・クンナスも80年代に活躍します。マウリ・クンナスは現在、フィンランドを代表する絵本作家ですが、早い時期に日本でも紹介されています。原書の表紙と、日本語での表紙を並べてありますので、見比べてください。そして、フィンランドの展示の中に、マイヤ・カルマという名

前が出てきます。マイヤ・カルマはフィンランドの自然を描かせたら右に出るものはいないといわれるような画家ですので、マイヤ・カルマの名前にも注目してください。80年代には、アイスランド、フェロー諸島の本もいくつか紹介しています。

### **IX 1990年代——大人と子どもの本の垣根を越えて**

では、次に90年代を見て行きます。90年代には、デンマークでは、ルイ・イェンセン、それから、70年代から活躍を始めている、ベント・ハラ、ビャーネ・ロイターという三人の作家がとても重要です。ルイ・イェンセンは、『100のお話』など、いろいろなものを題材に、短いお話をたくさん書いています。ありとあらゆるものを題材にして書くお話は、アンデルセンを思わせるとも言われています。その、ルイ・イェンセンの本に絵を描いているのが、現代のデンマークを代表する画家、リリアン・ブレガーです。リリアン・ブレガーの絵は、他のいろいろな作家のところで見られます。それから、デンマークのディーナ・ゲラートという画家ですが、展示に使われた、『ニルス・クリムの地下旅行』では、このディーナ・ゲラートの絵本を出しました。こういう絵本の絵も描いているのですが、『レオポルドが悪い子になった日』のような、ブタを主人公にした絵本も展示されています。最初のデンマーク語の詩を書いたキアステン・ハマンの『チョコレートの世界』という絵本も展示してあります。

そして、スウェーデンでは、マッツ・ヴォール、アニカ・トールといった作家が書いた青少年向けの小説が充実しています。その一方で、絵本の方でも、一番最初の北欧の地図を描いた、アンナ・ヘグルンド、それから、「嵐よ、やって来い」と背伸びしていた女の子と犬を描いたエヴァ・エリクソン、その人たちも、この時期に大変活躍しています。

日本では、かなり以前に翻訳、紹介されたけれども、その後、あまり広がらなかった、でも、本国では、もっともっと人気が高まっているという例として、ペテルソンというおじさんと、フィンダスという猫の組み合わせの絵本が、展示の流れの中にも、特別コーナーのクリスマスのところにもありますので、注意してご覧になってください。

エヴァ・エリクソンは、バルブロ・リンドグレンや、ウルフ・ニルソンなど、いろいろな人と一緒に絵本を作っています。また、国を越えて、デンマークのキム・フォップス・オーカソンという作家と一緒に書いた『おじいちゃんがおばけになったわけ』という本があります。これは、図録の裏や、チラシにも使われています。

ノルウェーからは、『ソフィーの世界』で有名な、ヨースタイン・ゴールデルの名前を挙げたいと思います。『ソフィーの世界』だけでなく、その後もたくさんの作品を発表しています。

フィンランドでは、『麦わら帽子のヘイナとフェルト靴のトッス』のシニッカ・ノポラ、ティーナ・ノポラのノポラ姉妹の名前も、ここで挙げたいと思います。これは、その中の1冊です。展示では、流れの中でも紹介していますし、クリスマスのところでも、またノポラ姉妹のこのシリーズがあります。

この90年代からは、アイスランドの絵本、フェロー諸島の絵本も、とても綺麗なものが出ています。アイスランドの『青い惑星の話』というのは、若い作家の作品ですが、とても評判になりました。フェロー諸島の絵本では、『日が昇って残念』という話があります。昔、フェロー諸島はぼつんと離れて、いくつかの小さな島がありましたけれども、それを移動させようとしたトロルの話が絵本になっています。結末は、うまくいかずに日が昇ってきて、トロルは石になってしまったという話です。それから、フェロー諸島の絵本には、アザラシがたくさん描かれています。急な岩場に、アザラシがたくさん住んでいるという話などがあります。

## X 2000年以降——多様化する子どもの本

最後は、2000年代になりますが、いろいろな新しい作家が出てきていますし、以前からの作家も新しい作品を書いています。デンマークからは、『ハリー・ポッター』ほどではありませんが、もし人気の高い作品を挙げるとしたら、リーネ・コーバベルという作家の『秘密が見える目の少女』のシリーズです。それから、今年のアンデルセン賞作家賞の候補になったヨセフィーネ・オテセンという作家も、いろいろなシリーズの本を書いています。

スウェーデンからも、オロフ&レーナ・ランドストロム夫妻や、ピーア・リンデンバウムといった人たちが引き続き活躍しています。リンデンバウムの『エルセ・マリーと小さなパパたち』という絵本はとても面白いので、紹介します。主人公の女の子には、パパがいないわけでもなく、一人いるわけでもなく、小さなパパが七人います。そして、この絵本の中に、お母さんと、エルセ・マリーと一緒に、七人のパパたちが一緒にお風呂に入っている場面があるのです。これはきっとスウェーデンの感覚では、こういう場面があっても全然構わないということだったのでしょう。この本がアメリカで紹介されたときには、これは、椅子に座って、本を読んでいる場面に変えられたそうです。この、小さなパパたちと、どう関係するというわけでもないのですが、セシーリア・トルッドという画家の絵にこういうものがありました。5匹の小さなお猿さんがベッドの上で跳ねています。何か指や手を使って遊ぶ歌のようです。だんだん跳ねているお猿さんが少なくなっていく、最後には、人間のお母さんもベッドの上で跳ねてから、やはりいなくなるというものです。先ほどのリンデンバウムの本ととくに関係あるわけではありませんが、ちょっと興味深かったなので、紹介させていただきました。

それから今回の展示にある、茶色の牝牛と、黒いカラスのコンビの絵本をご紹介します。これは、今スウェーデンでとても人気があるからということで、最後に急遽付け加えた『マンマ・ムー、小屋をつくる』という絵本です。牝牛のムーは、何でも人間の真似をしたがり、ノコギリで木を切って、木の上に小屋を建てようとしています。理性派のカラスはそれを止めようとするのですが、牝牛はお構いなく小屋を建てます。カラスの方は、「それならば」ということで、自分でも立派な小屋を立てるというお話です。この他にもシリーズになっていて、ブランコに乗ったりとか、いろいろなお話があります。

2000年代のノルウェーの絵本では、一番最初に紹介しました、大きな口を開けている女の子の絵のように元気のある絵を始め、アキン・デュサキンのようにトルコ系の人の絵や、アンデルセン賞候補にもなった、スヴェイン・ニューフスという画家の絵などが、この展示の2000年以降のコーナーで楽しんでいただけます。

そして、この時代は、フィンランドが、とても充実しています。ペッカ・ヴオリの娘のユリア・ヴオリの「ぶた」シリーズが、人気があります。それから、まだ日本では紹介されていませんけれども、北欧では、各国で同時発売されるほど人気がある、『ヴェスタ・リンネアちゃんと怪物ママ』という絵本があります。これも開いて展示してありますので、どうぞ注目してください。そして、最後に1冊、『おばあちゃんの秘密』というアイスランドの絵本があって、流れの方の展示は終わります。

## **XI 特別コーナーの紹介**

その後は、特別コーナーです。四隅にありますので、移動が大変かもしれませんが、それぞれにテーマを設けて展示しました。本来ならば、流れの中に盛りこむべき重要な作家や、画家のものが、特別コーナーの方に押し出されてしまったという場合があります。例えば、クリスマスのところにアルフ・プリョイセンのクリスマスの歌や、お話を集めた本が2冊あります。それから、エルサ・ベスコフのものなど、流れの方の展示で、どれほど重要な作家や画家であるかが分かった後、特別コーナーを見ると、楽しみが増すかと思えます。

「北欧神話」は、流れの展示では最初に小さな本を挙げただけでしたが、特別コーナーでは、絵本を2冊展示しています。その絵本を見ると、表紙だけですけれども、「ああ、オージンの乗っていた馬は8本足だったのか」とか、「2羽のカラスが、世界中のことをオージンに伝えているのだ」とか、北欧神話のいろいろな断片的な知識が絵に反映されているところが面白いと思います。

それから、「昔話」や、「カレワラ」のパロディー、トムテ、ニッセ、トントウといった小人たち、そして、トロルのコーナーもあります。小人たちは皆、赤い帽子を被っています。でも、赤い帽子を被るようになったのは、スウェーデンのイェンニ・ニューストレムが描いてからで、それ以前は、灰色の地味な帽子だったそうです。また、彼らはおかゆが大好きだということで、おかゆのついている絵本もあります。

それから、北欧の四季ということで、夏、それから、復活祭、そして、冬の12月のロシア祭。ロシア祭は、小さな保育園でのロシア祭の様子ができるように、絵本が展示されています。周囲の父兄の人が写真を撮っているのは、日本と変わらぬ光景です。その上に、もっと大きな写真のポスターが展示されていますので、ご覧になってください。

フェロー諸島とアイスランドは、展示されている320冊の中では、比重が少ないものですから、写真を壁に展示いたしました。

最後のハンス・クリスチャン・アンデルセンのコーナーですけれども、各国語で出版さ

れたアンデルセンの『ナイチンゲール』、『雪の女王』などのお話がある一方で、2冊、大きな本が展示されています。それは、アンデルセンの手作り絵本です。アンデルセンが、友だちのアドルフ・ドレウセンと一緒に、ドレウセンの孫たちにプレゼントするために、いろいろな雑誌から絵を切り抜いて貼ったり、アンデルセンが切り絵を作って貼ったり、詩を書いたりしたものが、1冊になっています。その絵本をもらった孫のアストリズや、クリスティーネの名前も出てきます。

以上のようなものが展示されている、今回の展示会です。どうぞゆっくりとご覧になってください。これで、私の話を終わらせていただきます。